

【短報】山口県におけるツヤヒラタガムシ属 3 種の初記録

ツヤヒラタガムシ属は体長 2 mm 程度の小型の水生甲虫類で、日本からはウスイロツヤヒラタガムシ *Agraphydrus ishiharai* (Matsui, 1994)、キベリオオツヤヒラタガムシ *A. luteilateralis* (Minoshima et Fujiwara, 2009)、ツヤヒラタガムシ *A. narusei* (Satô, 1960)、オガタツヤヒラタガムシ *A. ogatai* Minoshima, 2016、リュウキュウツヤヒラタガムシ *A. ryukyuensis* (Matsui, 1994) の 5 種が確認されている (Minoshima, 2016)。山口県ではこれまでツヤヒラタガムシ属のいずれの種も記録がなかったが、筆者らはウスイロツヤヒラタガムシ (以下ウスイロと称す)、ツヤヒラタガムシ (以下ツヤヒラタと称す)、オガタツヤヒラタガムシ (以下オガタと称す) の 3 種を確認したので初記録として報告する。

ウスイロツヤヒラタガムシ *Agraphydrus ishiharai* (Matsui, 1994) (図 1)

5 exs., 山口県岩国市錦町深川, 25. IX. 2018, 辻雄介採集・保管。

本種の国内における分布は、岐阜県、愛知県、三重県、滋賀県、兵庫県、島根県、広島県、愛媛県、高知県、熊本県、宮崎県で、それぞれ確認地点も限られた種である (Minoshima, 2016; 森, 2017)。

確認場所は県東部を流れる一級河川錦川水系の宇佐川で、錦川本流との合流点より約 4.2 km 上流である。山間部であるが、比較的開放的で緩やかな流れとなっている区間の水際砂礫帯で採集された (図 2)。これは他の採集地の確認状況によく一致する (林, 2009; 中島, 2014)。また、本種の成虫はある程度決まった時期に出現する可能性が示唆されている (中島, 2014)。今回の確認地点に 11 月 3 日および 11 月 20 日に再訪したが、いずれも本種は全く再確認できなかった。この期間中に大規模な出水や工事などによる大きな環境変化はなく、上記同様にやはり成虫の出現時期は限られる可能性がある。

ツヤヒラタガムシ *Agraphydrus narusei* (Satô, 1960) (図 3)

3 exs., 山口県岩国市錦町広瀬, 20. IX. 2018, 辻雄介採集・保管。

本種の国内における分布は、北海道から本州、四国、九州、大隅諸島に広範囲にわたっている (Minoshima, 2016)。

確認場所は、ウスイロが確認された宇佐川と錦川本流との合流点より約 3.8 km 上流の錦川本流で

ある。合流点からの距離はウスイロの確認場所と大きな差はないが、こちらの方がやや上流的な景観の場所であった (図 4)。前種同様、水際の砂礫帯を攪拌して得られた。

オガタツヤヒラタガムシ *Agraphydrus ogatai* Minoshima, 2016 (図 5)

13 exs., 山口県周南市大潮, 1. XI. 2018; 8 exs., 山口県山口市徳地野谷, 12, XII, 2018, 相本篤志採集・保管。

本種は福岡県古賀市産の標本を基に近年記載されたばかりの種である (Minoshima, 2016)。国内では現在のところ、福井県、岐阜県、三重県、兵庫県、和歌山県、島根県、愛媛県、香川県、福岡県、長崎県、鹿児島県で確認されている (Minoshima, 2016)。

本種はツヤヒラタよりも細流を好むと言われており (Minoshima, 2016)、今回の確認場所も錦川支流屋敷川の源流域 (周南市大潮) 及び佐波川水系下ヶ原川 (山口市徳地野谷) の山地溪流で、流れ幅は広い箇所でも 1.5~2.0 m 程度である (図 6)。他種同様に水際の砂礫帯を攪拌して得られた。ウスイロは 9 月に確認された場所において 11 月には全く再確認できなかったが、オガタは 11 月及び 12 月中旬にも確認された。少ない観察例のため推測の域を出ないが、ウスイロとは生息環境とともに成虫の活動期間なども異なっている可能性が示唆された。

これら 3 種の分布状況は、ツヤヒラタとオガタではオガタの方がより細流を好み、ほとんど混生することはない (Minoshima, 2016)、またツヤヒラタとウスイロでは、ウスイロの方がより下流域に生息すると言われている (林, 2009)。したがって、同一水系では上流から下流に向かってオガタ、ツヤヒラタ、ウスイロとすみ分けていると考えられる。今回ツヤヒラタガムシ属 3 種を錦川水系の異なる 3 地点で確認し、オガタのみ別水系からも確認した。オガタはいずれの水系においても最上流域の細流で確認され、他の 2 種とは明らかに異なる環境であった。しかし、ツヤヒラタとウスイロは本流と支流の合流点からの距離がほとんど変わらなかった。合流点付近で調査すれば、あるいは混在している可能性もあると思われる。

今後も調査を継続して行い、山口県内での分布調査とともに、同一水系内での流程分布について明らかにしていきたいと考えている。

最後に、ツヤヒラタガムシ属に関する様々な知見をご享受いただいた環境科学大阪株式会社の森



図1. ウスイロツヤヒラタガムシ.



図2. ウスイロツヤヒラタガムシ確認環境.



図3. ツヤヒラタガムシ.



図4. ツヤヒラタガムシ確認環境.



図5. オガタツヤヒラタガムシ.



図6. オガタツヤヒラタガムシ確認環境 (周南市大潮).

正人氏および北九州市立自然史・歴史博物館の簗島悠介氏にお礼申し上げる。

引用文献

- 林 成多, 2009. 島根県の水生ガムシ科. ホシザキグリーン財団研究報告, 12: 87-121
 Minoshima, Y. 2016. Taxonomic review of *Agraphydrus* from Japan (Coleoptera : Hydrophilidae : Acidocerinae). Entomological Science, 19: 351-366

森 正人, 2017. 兵庫県の水生ガムシ類. きべりはむし, 39 (2): 42-52.

中島 淳, 2014. 九州・宮崎県におけるウスイロツヤヒラタガムシの採集記録. さやばねニューシリーズ, (13): 39.

(相本篤志 747-0806 防府市石が口
3-10-10-2-B202)

(辻 雄介 742-0344 岩国市玖珂町 6450-48)